

# 南太平洋の一無階層社会における キリスト教受容過程

馬場優子

## I はじめに

キリスト教が地域社会の中核としての地位から衰退して久しいヨーロッパと比較して、現在、太平洋諸島の諸社会におけるキリスト教教会の占める位置は多くの外来者を瞠目させるであろう。

太平洋島嶼社会のキリスト教化は18世紀、西欧列強が自国の権益を求めて太平洋地域に進出し、植民地化を行うのとほぼ同時並行的に行われた。その意味で太平洋島嶼社会のキリスト教化はきわめて政治色の濃いものであった。もちろんキリスト教の旨とするところが「異教徒」に福音を伝え教え、入信を促す伝道にある限り、政治的影響力とは分離できない関係にあることはいうまでもない。政治的影響力を利用して権威を確立することは布教のために非常に有効な手段となるからである。各地に派遣されたキリスト教宣教団は原則として政治活動との関わり合いを避ける立場をとっていた<sup>①</sup>が、現実には宣教師の活動や生活から当該地における政治は切り離せなかった。

ポリネシア地域においては、ヨーロッパ人宣教団による首長クラスへの物質的援助に対してキリスト教の擁護という報酬を得るという両者の協力関係が広く見られた。宣教師が首長クラスの相談役・助言者となって政治的に介入するという、キリスト教受容過程のひとつのパターンがこれである<sup>②</sup>。このような首長クラスの存在する階層化された社会でのキリスト教化過程はこれ迄にも多く研究されてきた<sup>③</sup>。本稿は階層化されていなかったポリネシアの一島嶼社会におけるキリスト教受容の過程を跡付けし、文化変容のひとつのモデルを呈示するものである。

本稿が対象とする西ポリネシアのニウエ島にはポリネシアの他の首長制社会のように最高首長を頂点とする入れ子構造をもつ政治・社会組織はなかった。島の各地域は双系的の出自システムをもつ親族集団 (*magafaoa*) を中核とする部族によって占有されており、各部族は *iki* もしくは *pule* (chief) をリーダーとして割拠していたが、島全体の覇権を握る大首長や最高首長は存在していない。正確に言えば、過去二つの時期に *patuiki* (king) と称する身分は置かれたが、それは最高首長とは本質的に異なる。後者は系譜的に長子の系統の家族の長子が世襲的に継承してゆく身分であり、またそれは宗教的にも世俗的にも人々を支配する。一方、ニウエ島の *patuiki* は非世襲的であり系譜上の地位は問われない。戦場における武勇や戦闘能力などの功績により衆目に認められた者が就く。いわば最強の戦士であった。強さの根源は霊力 (*mana*) とされているから、*patuiki* はその強い力をもって島を早魃、ハリケーンその他の自然災害から守り、島の豊穡を守護し、島に幸運をもたらさねばならない。その役割が果たせなかった時には非難を浴び、殺害され、別の強力な戦士が *patuiki* となった。この制度は初め、18世紀半ばにトンガやサモアとの接触により触発されて起こり、19世紀初頭に途絶えたといわれる<sup>④</sup>。

次に *patuiki* が置かれたのはヨーロッパ人との接触後の1876年で、英国国王に対する島全体の

対外的代表者として交渉するなどその必要性から復活させたのだが、三代目の王 Tongia が 1917 年に死亡し、その後この制度は廃止された。復活王制においても *patuiki* は英語で king と訳されはしたが政治的影響力はなく、むしろ宗教的な役割を担っていた。前期王制と同様、特定の系譜とは無関係にいずれかの地域の強い戦士が選ばれた。政治的決定は各地域から *iki*, *pule* が集まる会議 (*fono*) にて行われた<sup>5)</sup>。この時代には英国人宣教師が在留しており、彼らの記録によると、*patuiki* への人々の態度や言葉遣いは村の *iki* に対するものと同じであったという。

各地域の首長 (*iki*, *pule*) も本質的には同じである。戦闘における強者 (*toa*) が *iki* あるいは *pule* であり、人々の尊崇の対象とされて他の人々より発言力があつた。しかし彼個人の能力や資質に基づいたリーダーシップであつて世襲ではなく、系譜的に特定の家系に定められた身分ではない。いわば誰にでも開かれ、しかも能力を備えている間みみの地位であつた。

以上のようにニウエの社会はトンガ、タヒチ、サモア等に見られる階層化された首長制社会ではなかつた<sup>6)</sup>。

太平洋諸島ではカトリックとプロテスタント諸派が入り乱れて布教活動を展開したが、ニウエ島は London Missionary Society<sup>7)</sup> (ロンドン伝道教会。以後、L.M.S.と記載する) の重点布教地域のひとつであつた。ニウエ島の近代化過程は L.M.S.の活動を抜きにしては語れない。同島において聖職者——ヨーロッパ人宣教師および土着の聖職者——はキリスト教の伝来以来、現今に至るまで極めて特徴のある地位を占めている。以下、彼らの役割を中心に当島嶼社会の変容について考察する。

資料は公刊、未公刊の文献・文書ならびに筆者の 1994 年以来数次にわたる現地調査において得られた情報に基づいている。L.M.S.関係の文書等未公刊の資料は下記のものを使用した。

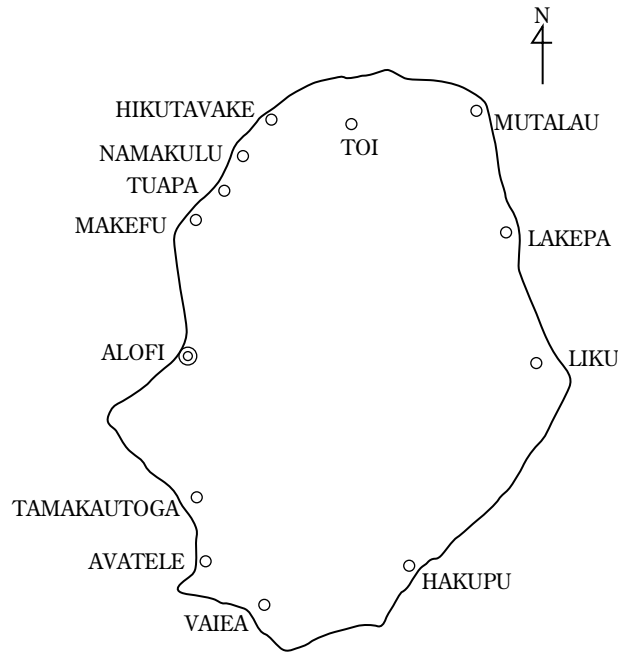
- \* ニューゼaland国立オークランド大学図書館 Pacific & NZ Collection 所蔵のマイクロフィルム
- \* ニューゼaland国立図書館 Alexander Turnbull Library の Manuscripts & Archives Collection 所蔵マイクロフィルム
- \* 大妻女子大学図書館所蔵マイクロフィルム

## II ポスト・コロニアル期ニウエ社会

火山活動の影響で隆起したサンゴ礁の島、ニウエ島は西ポリネシアの大洋に浮かぶ孤島である。付近の島といえば 480 キロ西方にトンガ諸島、660 キロ北西方にサモア諸島、930 キロ東方にクック諸島のラロトンガ島が控える、海洋の一滴のような島だが、サンゴ礁としては最大級で面積はほぼ 259 平方キロある。島の外縁部は干潮時に現れる岩礁を別とすれば海面から高い所で 69 メートル、低い所で 28 メートルの高さがあり、急峻な崖が周囲をめぐっている。

赤道と南回帰線の間に位置する熱帯の島だが、年間を通して気候のはっきりと異なる二つの季節——湿潤多雨の夏季 (12 月から 3 月) と冷涼少雨の冬季 (4 月から 11 月) ——から成る。夏季の平均気温は摂氏 27 度、冬季のそれは 24.3 度であり、島民にとって冬は寒い季節であり、流行り風邪に見舞われることもある。

島の人口統計は 19 世紀半ばに L.M.S.の宣教師によって行われたものを嚆矢とする。その時の人口は約 4300 人であつた<sup>8)</sup>。その後増加して 5000 人前後を一進一退した後、1974 年、ニューゼalandの保護領からの独立を境に急速に減少する。1990 年代には 2000 人前後となり、2000 年以降、2000 人を割った状態が続いている<sup>9)</sup>。減少の理由には海外労働移住や土地所有関係など経済的



現在の村落図

問題が大きく絡んでいるがここでは立ち入らない。

ポリネシアの他島と同様、移動焼畑耕作に従事している。しかし、小島ゆえに土地面積が限られているうえ、島の大部分を熱帯雨林と灌木林が占めており、耕作可能地は島全体の60~70%にすぎない<sup>③</sup>。サンゴ礁が風化した石灰岩の上を薄く土が覆っているだけのこの島は肥沃な土壌とはいええず、一度耕作に利用された土地は土壌の回復を待つ為、20年間は休耕地にせざるを得ない。そうした制約された条件の下で人々はタロイモ、ヤマイモ、キャッサバなどの根茎植物やココナツ、バナナ、パパイヤ、ブレッドフルーツなどの果樹を栽培している。現在、農作物は自家消費あるいは週2回の市場でわずかながら販売する島内消費用であり、輸出用生産物ではない<sup>④</sup>。

1974年、ニウエ島は20世紀の初めから続いているヨーロッパ系の保護領としての地位（1900年英国領、1901年ニュージーランド領）と決別し、ニュージーランドと自由連合下にある自治国家として独立した。同年発布されたニウエ国憲法には、ニウエの外交および防衛はニュージーランドの傘下にあること（第6条）、ニュージーランド政府は経済・行政上ニウエに必要な援助をすること（第7条）、ニウエ島民はニュージーランドの市民権を持つこと（第5条）が明記されている<sup>⑤</sup>。

この憲法に基づいて国会が開設された。議員は全13村落の代表一名ずつ（ただし首府であるAlofiのみ人口の相対的な多さからAlofi北とAlofi南に分かれ）合計14名に加えて全国区6名、合わせて20名から構成される。この議会に完全な立法権があり、ニュージーランド議会はニウエに関するいかなる法もニウエ政府の要請と同意がなければ制定することができない。内閣は4人の大臣から成る。議会が選出する首相（Premier）と首相が指名する3人の大臣（観光・健康・教育・コミュニティ・公共放送担当大臣、経済開発・貿易・輸送・行政サービス担当大臣、公共工事・農林・水産・郵便・電信・電話担当大臣）であり、ここに行政の責任が存する。

村落レベルには選挙によって選ばれる議長と4名の村会議員から構成される村落会議があり、公

共施設・設備等村の福利・厚生全般の向上について審議し、率先して実行する責任をもつ。

現在、ニウエにはL.M.S系のニウエ教会 (*Ekalesia Niue*) 以外に Seventh-Day Adventist (安息日再臨派), エホバの証人 (ものみの塔), モルモン教, ローマ・カトリック教などが入ってきているが, *Ekalesia Niue* 以外の宗派は比較的最近伝来したもので, 人口の多い首府 Alofi に教会をもつのみである。島の圧倒的多数はニウエ教会に属しており, 各村落にある教会に所属している。村の人々はそれを中心に村落生活を営んでいる。

キリスト教と教会を中心に据えた生活は島民たちのライフスタイルそのものを形作っているといえよう。現代の行政村落はそもそも L.M.S.の宣教師が布教のために伝道所の周辺に人々を集めたところから発しているのだから, どの村もデザインが似ている。教会堂を取り巻く広々としたチャーチ・グリーン, その一隅に牧師館と鐘楼が建てられている。そして歴代の牧師の大小の墓が周囲に散らばっている。

礼拝の曜日および時間はどの村の教会も同一で, 日曜日は午前中と午後一回ずつ, さらに水曜日の夕方にも行われる。年配者および成人女性の中には3回の礼拝すべてに出席する者がいるが, 大概の村人は日曜のみ礼拝に出かける。現在, 島民のなかで腕時計を身につけている者が増えてきたとはいえ, 時計による時刻認識に基づいて行動を律する必要があるのは政府機関勤務の者や学校関係者をはじめとする一部の村人であり, 多くの人々はその必要に迫られてはいない。しかし, 礼拝を定刻に始めるのはL.M.S.の監督・指導により根付いたものである。ここで教会の鐘が重要な働きをする。

礼拝が始まる前に数回, 執事が鳴らす鐘の音が村の隅々に響き渡る。その音には意味があり, 例えば Avatele 村の日曜午前の例でいうと,

- 9:00 第1鈴 : 起床, 身支度開始
- 9:30 第2鈴 : 着替え, 結髪
- 9:50 第3鈴 : 家を出る
- 10:00 第4鈴 : 礼拝開始

鐘の音の意味は村人たちに共有されており, それに従って準備などの行動をすれば礼拝に間に合うのだ。

教会に礼拝に行くことは人々にとってハレの日の行動である。シャワー (のある家は) を浴び, 香りの良いオイルを身体に塗り, 正装する。男は, 老人から子どもに至るまで背広にワイシャツ姿で, ネクタイを締めて革靴を履いている (最近では流行の上等そうなスニーカーを履いている子どももいる)。成人女性はワンピースかスーツを着て靴を履き, バッグをもっている。つばの広い帽子は成人女性にとり不可欠だ。少女たちも晴れ着に身を包み, 髪を美しく結び上げている。子どもたちも——歩き始めたばかりのヨチヨチ歩きまで——揃って晴れ着で着飾り, 髪を結び, ネックレスまで付けている。

チャーチ・グリーンは子ども達の遊び場にもなる。また, 村の青少年や成人がクリケット, バレーボール, ラグビーなどの練習をする場所でもあり, 他の村との対抗試合を行う場でもある。いわば家族集団を超える村の公の行事や活動及び村落を超える島全体に関わる活動が行われる空間である。

牧師は他村出身者でなくてはならない。各村落教会の会衆は彼らを選び, 契約した牧師を村の牧師として招き, その家族と子ども牧師館に住まわせる。彼らの生活を支えるのは村人の寄付である<sup>⑥</sup>。

かつてキリスト教の伝来後, 現在のように沿岸部に村落が作られる前は, 人々は *fagai* という集

団をつくって、内陸の耕作地から沿岸の伝道所近くに出てきた時に共同で居住し、共同で食事をしていた。この集団が交代で教会や牧師に食糧、燃料およびその他の必需品を提供していたが、*fagai* 同士の寄付競争はすさまじかったという<sup>7)</sup>。

現在は *fagai* という単位は機能していない。一村落を 3~4 の地区 (*vehevehe*) に分割し、一年間を 4~3 期に分けて各 *vehevehe* の当番制により食料品、生活用品、現金を牧師一家に支給している。当番になると一家族あたり毎週、100 から 300 NZ ドルの負担となる。

かつての *fagai* は同一のもしくは近隣の耕作地を利用している者の集団であったから、同一 *magafaoa* に帰属するか、遡れば同一の *tupuna* (共祖) に辿りつく人々によって構成されていた確率が高い。これに対して *fagai* の機能を継承した *vehevehe* 組織は居住の本拠地が内陸部から沿岸地域に移動し、定住した後の制度で、行政村の内部を地理的に区分したブロックである。当然、同一 *fagai* に属する人々は村落内の近隣に定住したのであるから *vehevehe* 組織と同一ではないが重なりはある。

現在、島の人々が行う儀礼・儀式には出産祝い、誕生祝い、結婚式、葬式、断髪式(男児)、耳殻穴あけ式(女児)などの通過儀礼の他、村落単位で行う村祭りや教会新築祝い、島全体で行う建国記念日の祝賀会など個人、村落、国の各レベルで見られるが、どのレベルの儀礼においても L.M.S.系の牧師が重要な役割を果たす。開会宣言の後、個人および村落の儀礼では当該村の牧師の、国家レベルのそれでは首都 Alofi のニウエ教会の牧師の祈祷で始まり、次に、村レベルの儀礼では当該村選出の国会議員の、国レベルでは首相の挨拶が続く。教会の影響力は衰退の兆しはあるものの教会牧師は依然としてコミュニティ内で人々の尊崇の対象であり、牧師と執事を中心とする教会活動が村落生活を支えている。

教会活動の重要な部分に村落の福利・厚生のための諸活動がある。熱心なクリスチャンであってこうした活動に積極的に取り組む者が執事となり、やがて村落代表の国会議員に選ばれ、さらに大臣になるという道が開けている。国政レベルの政治的リーダーになるには地元の村落コミュニティのために「聖」「俗」両面での奉仕が評価されてはじめて機会がおとずれる。「俗」の領域のリーダーは「聖」の世界のリーダーでもあるのだ。

### Ⅲ 外来者の拒絶 (1774~1845)

ポリネシアの他の島々から人々がニウエ島に移動してきたのは考古学的には約 1000 年前に遡るといわれている<sup>8)</sup>。その後もサモア諸島、トンガ諸島、プカプカ島から波状的な移動が行われ、島はいつしか *Motu* (北部) と *Tafiti* (南部) の二つの社会的区分に分かれるようになった。この二つが相互に敵対する最大の単位だが、実際には各々の内部においても地域間の対立や *magafaoa* 間の抗争が恒常的に見られるという状態でヨーロッパ人との接触の時代を迎える。

最初にニウエ島にやって来たヨーロッパ人は英国の James Cook であった。彼が第二回目の太平洋探検の途上、ニウエ付近を通りかかったのは 1774 年のことである。前後 3 回、島の三ヶ所 (*Tuapa*, *Alofi*, *Avatele* といわれている) で上陸を試みたが、いずれも現地民の激しい抵抗にあって果たせず、止む無く他島に向かった。そこでは現地民の歓迎を受けたため “Friendly Islands” と名づけ (現在のトンガ諸島)、それに引き比べて攻撃的に追い払われたニウエ島を “Savage Island” と名づけた<sup>9)</sup>。

ニウエ島民のこの防衛的態度は外来者が持ち込む病気への恐れから来るものであったという説が有力である。それ以前にトンガ人が来島した折、病気が流行って、ニウエ人に多数の死者が出た。

それからというもの外来人と外来の船舶に対する警戒が一層、厳しくなり、ニウエ人であっても島外からの帰島者には非受容的となったという<sup>③</sup>。ニウエ人の経験則に基づいた外来者の拒否はその後もヨーロッパ人を寄せ付けなかった。18世紀末から19世紀にかけては欧米の捕鯨船が多数、南太平洋を航行していたが、Cookの記録から知識を得ていたためかニウエ島に上陸して島民と接触しようとする事は避けたようだ。

一方、1820年代から30年代にかけて英国の宣教師が南太平洋の島々で著しく活躍し、クック諸島、トンガ諸島、サモア諸島で伝道を成功裡に推し進めた。そうした背景のもとで1830年、L.M.S.の宣教師 John Williams がアイツタキ島（クック諸島）からトンガへ戻る途中、ニウエ島への上陸を敢行した。この時、乗船していた同じポリネシア人であるアイツタキ島出身の宣教師たちを差し向けて福音を伝えようと図ったが、彼らが恐怖心から拒んだので、代わりに二人の若いニウエ青年（Uea と Niumaga）を誘拐し連れ去った。

この二人にキリスト教の教えを説き、翌年、彼らをニウエへ帰島させた<sup>④</sup>。Williams は若干なりともキリスト教の影響がニウエにもたらされることを期待したのだが、まもなく島に伝染病が流行り、多数の島民が死ぬという事態が起こった。青年の一人 Uea は父親もるとも島民によって殺害されたが、Niumaga は辛くも島から脱出し、付近を通りかかった木材運搬船に助けられた。この時、Niukai という青年も同行した。彼が後に受洗して Peniamina となる<sup>⑤</sup>。

1840年6月、ツツイラ島（サモア諸島）のキリスト教改宗者の一行が L.M.S. の副宣教師に先導されて来島した。島に伝道の拠点を作ろうとしたが、やはり島民に襲撃されて成功せず、直ちに島を離れた。この時3人のニウエ青年を誘拐し、サモアへ連行した<sup>⑥</sup>。うち一人が Fakafitienua である。

1842年4月、L.M.S.の宣教師 Aaron Buzacott が3人のラロトンガ（クック諸島）人宣教団教師とニウエ人 Peniamina を伴って来島した。Peniamina にとりこれは10年振りの帰島で、その役割はラロトンガ人教師がニウエでキリスト教の伝道を始められるよう、ニウエ島民を説得することであった。この時 Peniamina が島民に話して聞かせたキリスト教の「神」に島民の間に一瞬沈黙が漲ったという言い伝えがある<sup>⑦</sup>。しかし、ニウエ人達は宣教師一行との物々交換の方により強く関心をもった。ヨーロッパ人は棍棒や槍などニウエ人の武器と交換に彼らが欲しがっている金属製の釣り針や斧を与えたのである<sup>⑧</sup>。

この時の宣教師一行の上陸はニウエ人により許可されたものだが、それ自体がニウエ人の策謀であったという説もある<sup>⑨</sup>。いずれにしても宣教師一行は命からがら島を脱出し、サモアへ逃げた。ニウエへの福音伝道は再び失敗に終わったのである。

## Ⅳ キリスト教との接触と島内伝播（1846年～1850年代）

### 1. 宣教師たちの上陸

1846年、L.M.S.の宣教師である英国人の William Gill と H. Nisbett はラロトンガ人およびサモア人の宣教団教師と共にニウエ人の Peniamina と Fakafitienua を伴って Mutalau の Ulivehi へ上陸した。Mutalau の *toa*（戦士）であった Fakafitienua の上陸については彼の *magafaoa* の人々が受け容れたが<sup>⑩</sup>、ヨーロッパ人宣教師はいうに及ばずラロトンガやサモア出身の教師たちの受け容れは拒絶された。Peniamina の上陸は、要注意人物だがニウエ人であるという理由で Mutalau の *patu*（成人男子）達は認めた。しかし Peniamina が上陸するや否や伝染病を恐れる大群衆が彼の殺害を要求して騒ぎ出したので、彼は一旦、船に引き返さざるを得なかった。しかし再び機会を捉えて海岸で

ゴスペルを説き、人々のために祈りを捧げた。これが多くの人の心を動かしたと Turner は述べている。「殺すべきではない」という声が「病気が発生する前に彼を殺すべきだ」という声に混って聞こえてきたという。Peniamina は上陸したものの夜間の宿泊場所や食糧を提供してくれる人はいなかった<sup>②</sup>。最終的には彼は Mutalau の *pule* たちに保護され、数人の *tao* が彼の身の護衛にあたった。彼らは Peniamina のいう「神」についてもっと知ろうという事になった<sup>③</sup>。幸いにしてその後、伝染病の流行は発生しなかったため、彼は島から追放されることもなく、その説教は漸次、Mutalau 及び近隣地域に拡大していった。

1848 年、宣教師 George Turner が初めて Mutalau に至った時の村の状況を「人々は日曜日には家事をせず、礼拝に参加している。各家庭では祈り、とくに食前の祈りが最近の習慣となっている」と記し、Mutalau にキリスト教の教えが広まってきたという印象を表わしている<sup>④</sup>。しかし彼は同時に「ニウエ人の最大の動機は斧と釣り針をもらうことにある」<sup>⑤</sup>と記述しているように物質的欲求が彼らの行動に大きく影響を与えていることを強調している。

初めはサモア人教師を拒んでいたニウエ人たちも Peniamina の説教に耳を傾けるようになるとサモア人の話をも受け容れるようになった。1849 年にキリスト教道徳に反した行動をとったために Mutalau から出身村の Makefu へ追い払われた Peniamina<sup>⑥</sup>の代替として、L.M.S.の宣教師 Murray と Sunderland がサモア人牧師の Paulo とその妻を連れてくると、Mutalau の人々は彼らを歓迎したという<sup>⑦</sup>。

キリスト教が伝来し、拒絶の後に来た受容の時代にニウエ在来の社会はそれにどのように反応したのだろうか。

## 2. 在来宗教との衝突

この当時、島の全人口は 3000 人から 4000 人の間であったといわれるが<sup>⑧</sup>、島は *Motu* と *Tafiti* に分かれて敵対し、しばしば戦闘を繰り返していた。また *Motu* と *Tafiti* の内部もそれぞれに一定地域を占有するいくつかの部族があり、それらも境界線をめぐって相互に頻繁に戦闘を行っていた。同一部族に属する *magafaoa* は部族領域内の一定地域をそれぞれ占有していたが、*magafaoa* レベルですら相互に領域をめぐって紛争が絶えなかった。

各 *magafaoa* を統率する成人男子を *takitaki magafaoa* (*takitaki*=leader) という。彼は稀に、最も良い土地や最も大きい地積を占有することがあったが、通常、特別な権力を行使することはなかった<sup>⑨</sup>。戦時に闘争力を発揮して集団を防衛する *toa* の方がむしろその武勲ゆえにはるかに強い社会的影響力を持っていたとする見方もある<sup>⑩</sup>。初期にヨーロッパ人や宣教師が首長と考えたのは恐らくその多くが *toa* であろう。戦争その他必要な時に部族の *magafaoa* が集まり、その *takitaki* たちが暫定的な政府を構成する。そして各部族は戦時リーダーである *toa* たちの指揮の下に戦ったのである。

*takitaki magafaoa* も *toa* も世襲的な地位ではない。ニウエには他の多くのポリネシア社会のように世襲的な首長も大きな影響力を持ち権威ある存在である高位首長もいなかったので宣教師たちはこの島では伝道が困難であったという<sup>⑪</sup>。そして在来の宗教的職能者である *taula-atua* が人々に心理的に強い影響を与えていたことも宣教師にとり負の要因であった。

*taula-atua* は伝来の神々の *mana* を蓄え<sup>⑫</sup>、神々と人々の間の媒介者としての役割をもっていた。祈祷を行い、病を治し、予言もするし、儀礼の祭司も行う、*shaman* の一種であると考えられる<sup>⑬</sup>。社会的影響力が強く、人々は畏敬の念をもっていたが、*patuiki* 同様、生産労働を免除された階層をなしていたわけではない。海で漁撈をし、畑で芋を作って自己の食糧を供給しなければならな

かった。だが、自己の利益のために *mana* を使うこともあったし、何よりも shaman としての仕事の報酬を得ていた<sup>⑮</sup>。

Peniamina はニウエで伝道を開始した頃、呪術で殺害を謀るなどこの *taula-atua* たちの抵抗を経験している<sup>⑯</sup>。Loeb も、Paulo や初期のサモア人教師たちにとり最大の障壁は *taula-atua* が行使する影響力の克服であったことを指摘している<sup>⑰</sup>。一つには *taula-atua* にとって信奉者が減ればそれまで得ていた報酬が減少し、その地位が脅かされる。それだけに彼らは必死で抵抗したのである。一方、宣教師側は、*taula-atua* との対立やその妨害に対して *taula-atua* に降りかかる災難や不幸な出来事はすべて「神」の怒りによるものであるという説明法を利用した<sup>⑱</sup>。言い伝えられているいくつかの寓話を示しておこう。

1) Tuapa の女性 *taula-atua* である Fanoheone は、人々に「あなたのやっていることは詐欺ではないか、もうやめておきなさい」と言われたが、人々の忠告に耳を貸さなかった。ある日、*uga* (ヤシガニ) が彼女の家の中を這っていた。その日は日曜日であり、キリスト教の教えでは働くことが禁じられている。それにも拘らず彼女は *uga* を取り焼いて食べた。数日後、彼女は足が不自由になり、*uga* のように這って歩くようになった。彼女は安息日である日曜日に *uga* を料理して食べたために呪われたのだ、と人々は噂した。天国の「神」の怒りにふれて彼女は生涯、*uga* のように這って歩いた<sup>⑲</sup>。

2) Paulo の時代の *taula-atua* の第一人者は Lakepa の Mulia であった。ある時、Mutalau の教会で開かれた宴会の折、彼は戦闘用の棍棒を振り回して「イエスは死ね」と叫びながら踊った。それから外に出て穴を掘り、その中に槍を埋めて「イエスよ、死ね」と呪いをかけた。この呪いはキリスト教徒に改宗した義兄弟の Ulimaka に及び、Mutalau の教会で一夜を過ごしていた彼は気が触れてしまった。彼は斧で Mulia の妻の首をはね、木に登って自殺を図ったが失敗した。そこへ Mulia の部下たちがやって来て Ulimaka の首を斧で切り落とし、死体を海に投げ込んだ。

3) Mulia は Hikutavake の *taula-atua*、Fakailikula を招いて宴会を行った。それは日曜日であり、Paulo とキリスト教会に対して意図的に対抗したのである。二人は *takalo* (war dance) を行い、槍を「神」のいる天空に向かって投げながら「天の『神』が我々の手で死ぬように」と呪文を唱えた。宴会が終わって Fakailikula とその親族たちは村へ帰ったが、村に着く前に Fakailikula は具合が悪くなり死んだ。その後、まもなく Mulia も死んだ。真の「神」が二人の虚偽を終結させるために殺したのである<sup>⑳</sup>。

しかしながら一方では *taula-atua* の一人が Uea と Niumaga の生還や Peniamina が新しい宗教を伝えに帰島すると予言したことも人々の間に語り伝えられている。それは Mutalau の Kilipalua であった。連れ去られた Uea と Niumaga が沢山の美しいイヤリングを持って帰島するという彼の予言に、多くの人がイヤリングと交換するものを持って二人の青年の両親の許を訪れた。二人が帰島する前に交換の予約が完了してしまい、彼らが帰島した時にはすべてのイヤリングは売約済みになっていたという逸話が残っている。Kilipalua はまた、Peniamina が大変小さな *tohi* (book) を持って帰島し天空に住む唯一の神について語るであろうという予言をしたと伝えられている。Mutalau の人々が「神」の言葉を受け容れるのにあまり時間がかからなかったのはこの予言があったからだ、



と Loeb は島民から聞いたという<sup>20</sup>。

新宗教に対して在来の宗教的職能者は、この様に一方でその到来を予言することによって自らの能力を顕示しつつも、危機感をつのらせて在来の神々への祈りを通して新しい「神」の排除を試み、新しい「神」のいう戒告への抵抗を示した。数々のそうした *taula-atua* の行為のうち、彼らにとって不幸な結果となったものが「神」による怒りであると解釈され、宣教師や牧師の説教を通して、また呪い言を恐れる人々の口から口へと島内に拡がり、伝承されてきたものと考えられる。

### 3. キリスト教の島内における伝播

ニウエにキリスト教を導入した Peniamina は上陸の地 Mutalau で布教活動を始めた。彼は3年後には姦通罪によって宣教団から追われて出身村の Makefu へ戻らざるを得なくなるが、その間に大勢のニウエ人をキリスト教に引き付けた。Peniamina の教えに従って改宗した人々の動機は一般に他のポリネシア諸島と同様、ヨーロッパ人がもたらした物質文化への欲求であったといわれるが、Talagi はこれに加えて Peniamina の読み書き能力への羨望——すなわち学習への欲求——も挙げている<sup>21</sup>。キリスト教が短期間に島民の関心を集め、彼らが説教師の言葉に耳を傾けるようになったことは宣教師 Turner と Nisbett による 1848 年の記録にも伺われ、Mutalau では、平和で争い事が少なくなっていること（依然として他部族とは敵対関係にあるが）、人々は日曜日には仕事をせず教会に礼拝に行くこと、各家庭では食前その他様々な機会に祈りを行うことが述べられている<sup>22</sup>。

1849 年 Peniamina の代替として初代サモア人宣教師 Paulo が赴任し、Mutalau に住んで布教を行ったのでそこには全土から新しいことを知りたいという人々がやって来た。口伝えられている人々は Avatele の Muatoga, Hakupu の Muifonua, Mose, Tavita, Liku の Iona Vemoa, Tuapa の名前不詳の *toa* 等々、みな *toa* である。この当時はまだ島は全体として戦闘状態にあり、他の部族や *magafaoa* の土地を通過するだけでも戦争になりかねない情勢であったから、殺されずに他部族の土地をいくつも越えて Mutalau へ行けるのは *toa* のみであったと推測される。伝承されている *toa* 達の活躍を述べてみよう。

1) Avatele の Muatoga は元来、*Motu* の *Toi* の人間であったが、スパイの役目をおびて Avatele に住んでいた。*Toi* の仲間に偵察報告をするために会った時、Mutalau の人々の間で新しい宗教が起こっていることを知った。訊いてみると人々は Paulo から贈物もろうという。その中には釣り針が入っていた。Avatele の海岸では特に釣り針が役立ちそう<sup>23</sup>。彼は早速 Mutalau に向かった。そこで彼が見たものは平和な雰囲気の中で人々が総じて幸せそうなことであった。彼が Paulo に「釣り針をくれ!」と叫ぶと彼はすぐもってきて与えた。もちろん、Muatoga に福音を語りながら。*Motu* と *Tafiti* は常に戦闘状態にあるため Muatoga は艱難辛苦の後、漸く Avatele に辿りついた。そして人々にキリスト教の教えを話して聞かせ、賛同者を集めた。村の *pule* や *patu* たちの批判や反対があったが、次第に Avatele 全域に浸透していった<sup>24</sup>。

2) Hakupu の Fineone の 3 兄弟 (Muifonua, Mose, Tavita) はみな *tao* であった。Mutalau で Paulo の説く新しい考え方に印象づけられ、教えを乞うた。そして人々に何を教えればよいのかと訊くと Paulo は「*Ha-kupu-Atua*」(Any words of God) を教えなさい」と言う。3人は帰郷し、人々を集めて新宗教の教えを語った。まもなく賛同者のグループを作り、この地を Hakupu-Atua と名づけた。数年後、Paulo がこの地を訪れた時、すべての *magafaoa* から大勢の人が参加して礼拝していたのでその発展ぶりに驚いたという<sup>25</sup>。

3) Hakupu の別の部族の *pule* である Iona Vemoa も新宗教を知ろうとして Mutalau へ行った。キリスト教の教えを聞いてから Hakupu への帰途、Liku で親類の家に泊まり、そのまま Liku の女と結婚してしまった。そして Liku の人々にキリスト教を教えることになる<sup>26)</sup>。

4) Tuapa のある *tao* が Paulo を愚弄しようとして Mutalau へ行った。そして次のような歌を歌って嘲った。

♪ Mutalau の奴らが有難がっているものって一体、何なんだ？

あいつらは「神」とやらを奉って祈っている

だがその「神」っていったいどこにいるんだ？

あっはっは！ あっはっは！♪

しかし、後にゴスペルが村々に拡がり、Tuapa にも聞こえてくると、彼は別の歌を作って歌った。

♪ 平和なことは良いことだ

力を合わせて平和を守ろう

平和なことは素晴らしい♪<sup>27)</sup>

以上のようにキリスト教が伝来の初期に島内に伝播していったのは主にニウエ人自身の働きによるものと言えよう。特に、島内全域がまだ戦争状態にあり、常に他地域や他集団の動きを探っていた *toa* たちは情報の入手に機敏であったことと、自領域を越えて動き回れるのは *toa* のみであったことから、初期の島内伝播は *toa* たちの力に与かっていると見なしてよい。この初期の拡散は、Mur-ray が 1852 年のニウエ訪問の後の記録に「・・・島内至る所にキリスト教信者がいる」<sup>28)</sup>と書いていることから、1846 年から 52 年の間のことと考えられる。

#### 4. サモア人宣教師の貢献

口頭伝承によれば、Paulo が伝道を始めてから数年間で島内のほとんどの地域にキリスト教信者のコミュニティが出現したという<sup>29)</sup>。彼らにとって第一に必要なものは礼拝を行う教会堂である。ニウエ語でこれを *faituga* というが、これは *taula-atua* が神々に犠牲を捧げた神聖な場所 *mata faituga* (*mata*=base, center) から由来する。ニウエで最初につくられた信者集団は Paulo が Mutalau で起したものである。パンダナスの葉で屋根を葺いたサモアの *fale* 風の *faituga* をつくり、それを中心に 2~300 人が集まった。Paulo とその家族は住居を提供され、食糧や日用品をも会衆から供出された<sup>30)</sup>。

次に Paulo は 1852 年、Alofi に信徒集団をつくり、二人のサモア人宣教師 (Mose, Kapela) を迎えたが Mose はまもなく姦通罪によって追放され、新しいサモア人宣教師 Samuela を迎えた<sup>31)</sup>。Avatele と Hakupu では土着民自身ですでに集まりをもっており、1854 年、Samuela は Avatele の牧師として赴任し、ここで彼の住居と教会堂を作らせる。これは島内最大規模で、1100 人は収容できるものであった<sup>32)</sup>。

当時の全人口が 4276 人と L.M.S. は記録しているが、その内、約 2000 人が Alofi の日曜礼拝に参集していたという。改宗者も劇的に増加し、1857 年には島全体で 677 人という数字があがっている<sup>33)</sup>。また、この当時は 3ヶ所の伝道所に教会が建っていたが、1859 年には 5ヶ所に増え、すべてサモア人教師が配置されていた。

まもなく老齡の Paulo は妻が死んだためにサモアに帰島するが、Paulo の時代にニウエ島のキリスト教界は顕著な変化を遂げたことはいうまでもない。Mose と Kalepa が後に「最初の頃はこの島の人々の著しい野蛮さと粗暴さゆえに導いて行くのが困難だったが、まもなくうまくゆくようになった」<sup>⑤</sup>と述べているように、Paulo の在職期間にかなりの変化があったのである。

*Motu*, *Tafiti* 間はもとより各地域間の目立った戦争はこの頃から減少する<sup>⑥</sup>。宣教師が釣り針やナイフと交換に人々から槍や手斧などの武器を取り上げたために戦いがしにくくなったこと、*toa* を中心としたキリスト教の地域間伝播が平時における彼らの交流を促したことなどがその要因と考えられる。改宗した島民達が定期的に教会あるいは伝道所に礼拝に来るようになったのもこの頃である。教会へ行く時にはヨーロッパ人風の服装をするようになり、それまで彼らが欲しがっていたヨーロッパの品々つまり「手斧やナイフなど実用的なものばかりでなく、礼拝にふさわしい服をも欲しがらなくなった」<sup>⑦</sup>。

Paulo はまたキリスト教倫理の普及にも努め、特に他人に所属する物を許可を得ずに持って行くこと——ヨーロッパ人はこれを“盗み”という——を戒め、一夫多妻<sup>⑧</sup>や不貞を禁じた。しかし、在来の所有や性および婚姻に関する観念の変更は、金属製の道具という余得をもたらすキリスト教の「神」へ関心を寄せることに比べれば容易にできることではなかった。

1853年、Paulo の在職中にも次のような事件が起こっている。英国の軍艦が Alofi に来航し、慣例通り物々交換が始まったが、一人のニウエ人が船からものを「盗んだ」。それに対して英国人は砲撃を始め、9人のニウエ人が死んだ<sup>⑨</sup>。また、初代現地民宣教師 Peniamina が地元女性との不義の廉で宣教団から追放されたが、再び、1854年、Alofi においてサモア人宣教師 Mose が姦通罪により免職された<sup>⑩</sup>。キリスト教的倫理道德の徹底は、次の時代にヨーロッパ人宣教師がサモア人宣教師に代わって来島定住し、布教活動を始めるまで待たねばならない。彼らはきわめて厳しい罰則規定によってニウエ人の道德律を変えてゆくのである。

以上のように Peniamina が種をまいたキリスト教がその後の10年間で島内各地に伝播したのはサモア人宣教師たちの貢献によるものといえる。彼らの宣教活動の中心は、ニウエにキリスト教信徒のコミュニティをつくること、礼拝および宗教教育の場（教会）をつくること、日曜礼拝および聖書学習に人を集めること、家族ぐるみの改宗を奨励すること、人々に倫理道德を教示することなどであった。そして1860年代になると Peniamina やサモア人宣教師が地ならしをして準備を整えたニウエに、初めて英国人宣教師が来島し、定住して本格的なキリスト教の布教を行うのである。それは W. G. Lawes であった。

## V キリスト教の発展（1860年～19世紀末）

### 1. モラルと規律

宣教師の任務は現地民の改宗および改宗した現地民の教育である。従って彼らの布教活動の基地である伝道所は宗教上の中心であるばかりでなく教育の中心をも兼ねている。その場所は多くの現地民が集まる所が望ましい。

ニウエにおいても宣教団は布教活動の便宜のために、それまで人々が分散居住していた内陸部から出て伝道所の周辺にはほぼ部族ごとに集落をつくらせた。そのようなコミュニティが島内各所に作られてゆき、これが核となって新しい村々が形成されて現在の行政村落となったのである。1861年、W. G. Lawes が来島し定住すると初めての英国人宣教師による本格的な布教とクリスチャン組織作りが始まった。各地に信徒組織が作られるに従い、上述の村落形成も盛んに行われた<sup>⑪</sup>。

この様な新しい村落では形成由来から見ても宣教師が指導的地位に就くのは言うまでもない。伝道所に集まった現地民たちはまるで生徒のように宣教師の教えを受けた<sup>②</sup>。宣教師は、彼らに新約聖書の教義を説明し納得させることは極めて困難な事であると悟り、モーゼの律法、とりわけ（第一項）偶像崇拜の禁止、（第四項）安息日の遵守、（第五・七項）殺人および盗みの禁止、（第六項）性道徳の遵守等の理解を教授内容の中心においた<sup>③</sup>。

宣教師と土着民はいわば教師と生徒の関係であるから、宣教師の発する言葉がそのまま人々の“法”となってゆく。その結果として祈祷の集まりが頻繁に開かれ、礼拝への出席が強制されるようになった。また、全般的にアングロ・サクソンの生活習慣が押し付けられ、日曜礼拝には最も良い晴れ着を着て行き、特別な料理を作って食べるよう強要された。しかし安息日には全ての仕事が禁じられ、火を起こすことも禁止されたから料理は土曜日におかねばならなかった。聖書の教えに沿わないことは全て罪深く、英国中産階級の価値観に反する如何なる慣習も未開で、不正、邪悪と見なされた。この様に英国中産階級の善悪基準を押し付けられ、それが土着民の倫理道徳律となっていったがこれはニウエばかりでなく広く太平洋諸島全般に見られることである<sup>④</sup>。

性道徳や結婚に関する第六戒律は土着の人々の在来の慣習と矛盾するものであった。在来の結婚のあり方では夫と妻の双方の利害一致が結婚継続の最大の要件であったから永続的な一夫一婦婚とはいえない。英国人のいう「不義・密通の禁止」は現地人宣教師や牧師さえ厳守するのが困難で、違反者が追放されたことは既に述べた通りである。

性道徳と関連して土着民の家族組織もキリスト教の規準に適合したものに变化させることがキリスト教化の過程で達成されねばならなかった。キリスト教の倫理観に基づく家族観・家庭観の導入も英国人宣教師の使命の一つであったのだ。そのため、彼らは若い女性の教育に特別の注意を払った。女子寄宿学校はニウエでは設けられなかったが、教会の諸活動を通して女子に厳しい貞操教育を施し、第六戒律違反者への措置は徹底的に不寛容であった。

土着民の行動は宣教師がキリスト教と共に持ち込もうとした近代西欧社会の規範から見れば風紀の乱れ以外の何ものでもなく、秩序と規律のある社会にするためには彼らの行為を律する法律を作り、それに違反した者を罰する必要がある。初期のニウエの法はこの様な背景の下に作られた。いわば宣教師が法の策定者であったといえよう<sup>⑤</sup>。モーゼの戒律以外にも近代英国社会において忌避されていた種々の行為が好ましくない、恥ずべき行為すなわち罪として強制力のある法の下におかれた。婚姻届を出さずに同棲する、喫煙、飲酒、喧嘩・口論、賛美歌以外の歌を人前で歌う、夜のダンス等が禁令の対象となった。また盗みと姦通が発生するのを避けるために夜間の外出も禁止された<sup>⑥</sup>。こうした規律に違反した場合の刑罰の確定には英国本国の慣習に則った裁判が取り入れられた。もはや個人的な復讐は認められず、近代的な法によって処罰を与えることにより秩序を保つ社会へと変貌していったのである。

刑罰・罰則規定の内容も当然のことながら英国社会の影響を大きく受けている。ニウエのみならずポリネシア全体として言えることだが、死刑は導入されなかった。島流しは群島社会では設けられたがニウエのような孤島社会では行われなかった。ヨーロッパ人の持ち込んだ刑罰は全体として、寛大な体系と言われる<sup>⑦</sup>。強制労働（道路建設作業、港湾修理等）が最も一般的で、次に一般的に見られたのが罰金刑であった（支払えない場合は労役に代えても良い）。ニウエではその他に鞭打ちの刑や洞窟への拘禁も行われた<sup>⑧</sup>。

正規の教会員が規律に違反した場合は刑実行以外に数ヶ月から数年の間、教会活動から排除された。以下にいくつかの例を挙げておこう。

- 1) Avatele の U は 1874 年に“無節操な振る舞い”ゆえに教会員資格を剥奪される。3 年後に回復。
- 2) Makefu の T は 1876 年に激昂したために会員資格剥奪。15 年後に回復。
- 3) Mutalau の T は 1878 年に喧嘩をして資格剥奪。12 年後に回復。
- 4) Hakupu の P は 1881 年に姦通ゆえに資格剥奪。2 年後に回復。
- 5) Tamakautoga の T は 1890 年に盗みをしたために資格剥奪。2 年後に回復<sup>9)</sup>。

宣教師 F. E. Lawes は現地民牧師や執事が身内の者を罰せねばならない時の手ぬるさを「キリスト教の教えを教授し、説教せねばならない立場の彼らに所信を貫く勇気がない」<sup>10)</sup>と非難している。実際、1893 年、*patuiki* であり前牧師であった Fataiki の姦通事件では牧師達は誰も彼を懲罰しようとしなかった。そこで宣教師代理の英国人 Cullen が彼を教会会員から除名したという<sup>11)</sup>。

## 2. 土着民聖職者の養成

W. G. Lawes の来島後まもなく、ニウエ人牧師を育成するための施設として宣教団は養成所を設立した。これがニウエで最初に作られた学校である。その設置目的は学生を説教と教育ができるように訓練することであった。聖書を学ぶばかりでなく、読み書き、算数、歌唱その他基本的な教育をも施しており、後者に大部分の時間を費やしたという<sup>12)</sup>。ニウエにおける初期のカリキュラムは詳らかではないが、1885 年の W. G. Lawes の後任の宣教師 F. E. Lawes の報告には算数、地理、聖書、歴史、釈義、神学等の教科書がないので教育が難しい、と記述されている<sup>13)</sup>ところから、これらは既に教授されていたのだろう。1892 年にはその他に英語、説教法学が加わっている<sup>14)</sup>。

聖職者養成所の目的は達せられ、修了後には各村落の教会の牧師に就任したり、海外へ宣教師として派遣される者が出現する。1862 年には土着民教師補が 8 人になり、1865 年には養成所の土着民教師が 6 人、村落教会の牧師 6 人のうち二人が土着民となった。4 人のサモア人牧師のうち二人は 1867 年に、残る二人は 1869 年に帰還したので、この時期をもってニウエにおけるサモア人宣教師の時代は終焉を告げる<sup>15)</sup>。

これに対して土着民聖職者が躍進するのだが、宣教師は村の教会や養成所の運営をニウエ人に託すことをあまり歓迎しなかった。F. E. Lawes は 1862 年の報告書に「現段階では現地人を主任牧師に指名することは好ましくない。彼らはまだそれ程進歩していないからだ。英国の宣教師がまだ必要だ」と書いている<sup>16)</sup>。この時代は、ニウエ人が宣教団に入るということは伝道所で非土着民宣教師の下で働くことを原則としていたのである。

## 3. 牧師の役割

キリスト教化後のニウエ社会では牧師が最も社会的に重要な人物である。各村落の教会には宣教師が任免権をもつ専属牧師が居住・常駐した。村内の家族・親族間の確執や対立あるいは内輪もめに巻き込まれて村の信徒組織が混乱状態に陥らないように、必ず他村出身の牧師が選ばれた。牧師は信仰の先導者であり、村で最も教養ある人物である。ニウエ語では牧師を *akoako* (teacher), *fai-aoga* (teacher) といい、教師を表す言葉と同一である。牧師は教師でもあるのだ。村内で極めて高い権威をもち、村人に規範、しきたり、掟を示す多大な影響力を持つ存在である。

牧師はキリスト教化以前の在来社会における *patuiki* 及び *taula-atua* のそれを継承していると考えられる。牧師は「神」の代理人と見なされ、*taula-atua* の持つ聖なる力を受け継いだ *tagata tapu* (a sacred man) であるとして人々から非常に尊敬された。牧師の下した決定に異論を唱えると、執

事<sup>24</sup>が牧師自身から厳しく懲らしめられたという。村の繁栄は牧師のお蔭であり、人々が牧師に必要なものを供給しないと恐ろしい結果を招くと考えられて食料その他生活物資を十分に提供した。逆に飢饉や旱魃等で物資欠乏に至った時には牧師の力不足と見なされて、非難の矛先はまず牧師に向けられた。牧師の地位から引き摺り下ろされた村もあるという<sup>25</sup>。在来の *taula-atua* 及び *patuiki* に代る聖なる分野のリーダーと考えられたのである。

一方、在留宣教師は島のキリスト教教会の宗教上の諸事項に関する最高権限を持っており、特に牧師の任免権と教会員資格の授与・剥奪権は彼に把握されていた。また、牧師養成学校の校長でもあり、聖書のニウエ語訳という任務を持ち、さらに島の医療や政治・経済等世俗的問題のアドバイザーでもあった。

全島レベルの教会会議が W. G. Lawes によって設立されたのは 1865 年である。当時存在した 6ヶ所のコミュニティ (Mutalau, Alofi, Lakepa, Hakupu, Avatele, Tuapa) から 6 人の *pule* が代表として出席するもので、月 1 回 Alofi で開かれ、法の策定が主な目的であった<sup>26</sup>。1876 年、全島教会会議は王制を復活させることとし、Mataio Tuitoga を復活後初代の王に指名した。この会議の議長は王である。宣教師は出席していたがアドバイスを与えるだけで、*pule* 達は宣教師の統制下にある教会の諸問題を討議した<sup>27</sup>。

村落レベルの教会会議の議長は牧師であった。この会議は各 *magafaoa* の *takitaki magafaoa* で構成され、村の聖俗両分野にわたる問題を審議した。牧師はこの会議で助言を受け執事が補佐していたので村の運営に関する権限が牧師に集中する事はなかった<sup>28</sup>。

#### 4. 贈与と献金

19 世紀末にはニウエのクリスチャンの間で宣教師の統制を離れて自立した教会を求める気運が強まった。L.M.S. の統制下にあることへの不満あるいは自立欲求の背後にある動機の一つは献金問題であった。

前述したように当時、人々は各村の専属牧師に食糧、日常必要な物品、金銭等を贈って生活を全面的に支えていた。牧師館を建てて牧師一家を住まわせ、農作物を栽培する畑地も提供した。しかし、実際には常に食糧を十分に贈られるのであまり農作業をする必要はなかった、ともいわれている。こうした牧師への奉獻を *fagai* もしくは *poa* というが、両者を区別して *fagai* はもっぱら食物に、*poa* は金銭に対して使われる場合もある。*fagai* あるいは *poa* はほぼ定期的に行われ、タロイモ、ヤムイモ、タピオカ、バナナ、鶏、ハト、コウモリ、ヤシガニ、魚、サトウキビ、マット等が献上された。これはキリスト教伝来以前に行われていた *taula-atua* や *pule* へ物品を送って *mana* と神々の恩恵を受けるという慣習が対象を牧師に代えて続けられたと考えられる<sup>29</sup>。牧師に *fagai* を贈ることにより牧師から祝福を得るわけだ。収穫物の最良のものや初実が *fagai* として牧師に贈られる事<sup>30</sup>がそれを物語っているであろう。*fagai* は *magafaoa* 単位で分担した。*magafaoa* の繁栄は供出した *fagai* や *poa* の量によると考えられていたため、各 *magafaoa* は競って生産物を奉獻した。そして貨幣経済の浸透とともに換金作物を金銭的に換算して供出するようになったが、やがて金銭による寄付 (*poa*) すなわち献金に変化した。1860 年代から 19 世紀末までニウエ教会は全体として各村の牧師への俸給に加うるに、2 万ポンドの献金を L.M.S 本部に送っている。献金をするために各村の男も女も子どもも必死で働いた。

この様にキリスト教の伝来前には *magafaoa* や村の繁栄は *pule* や *taula-atua* へ奉獻した *fagai* や *poa* の量によって決まると考えられていたため、各 *magafaoa* や村は競って彼らに奉獻したが、キリスト教時代には宣教師や牧師への *poa* と *fagai* を、さらに貨幣経済の浸透後は献金の多寡を競う

ようになった。特に村ごとの献金額は毎年公開され、村落間競争に拍車をかけた。人口の少ない Liku がキノコ栽培を導入して収益をあげ、それを換金して献金した為、それ迄献金額最高を誇っていた Hakupu を 1873 年に追い抜く等、村落間の競争は熾烈になっていった。

教会堂や牧師館の維持・建設費用はもちろん、教会運営のための経費、その他教会関連の諸雑費はすべて村民の献金で賄うため、人々は様々な労働をして収入を得た。例えば、Liku の青年達は 1883 年に Malden 島へ行き、10 ヶ月間鳥糞石の採掘に従事して帰島したが、その時の収入が Liku の教会や学校施設のドアやガラス窓の費用となった。Vaiea の青年達も海外で労働をして 1889 年に新しいチャペルのペンキ代と鐘を買う基金に献金した。1891 年には島民の献金により、ニウエ教会はニューギニア宣教の為の船を購入して L.M.S.へ寄贈している（船の名はニウエ号）<sup>2)</sup>。

## VI キリスト教教会の土着化（1901 年～1946 年）

### 1. 牧師養成所の発展

1900 年に英国の保護領となったニウエ島は翌 1901 年にニュージーランドに併合され、駐在弁務官を迎えて新たな行政体制の下での島の統治が始まった。島のキリスト教界では土着民牧師の養成がますます活発化してゆく。それまで、毎年、各村落教会の執事が 1、2 名の研修生を選抜して送り込んできたが、彼らは年齢の点からも資質の面からも宣教師の意に沿わなかったため、1935 年以降は宣教師自らが現地人牧師を連れて直接村を回り、素質があり村の教会活動へ積極的に参加している適切な人材を探して推薦するようになった。毎年 10 月に彼らが集められ、選抜試験を受けた。

Alofi の牧師養成所に集められた研修生たちは各自もしくは各村落が建てた家に住んだ。勉学は週 3 日のみ行われ、他の 3 日間は Alofi の人々が提供してくれる土地を借りて農作業をするという日々であった。出身村の教会や親族の援助もあったが、農作業、狩猟、漁撈等の労働も養成所での訓練の重要な部分であるとされて食糧自給の生活を送ったのである。日曜日は牧師職を実地体験するために村の礼拝へ行くこともあった。研修生の説教に対しては教会は食事と金銭を贈った<sup>1)</sup>。

養成所では 6 年間のコースで教育が行われた。週 3 回の講義では算数、英語とニウエ語での読み書き、聖書学、牧師学、教会史、地理学、神学、説教法、印刷技術等の教科科目が教授されたが、勉学内容のレベルは低かったといわれる。初めは試験すらなかったため 1910 年に F. E. Lawes の後継者としてやって来た Gavin Smith が試験制度を導入した。養成所の教師は在留宣教師が主にこれにあたったが、次第に土着民牧師たちも教育に携るようになった。研修生の妻たちも牧師の妻として必要な教育を受けた。その内容はニウエ語と英語の読み書き、算数、聖書学、手芸、編み物、鉤針編み、裁縫、アイロンがけ、家庭経営法であった<sup>2)</sup>。

L.M.S.が継続的に在留宣教師を送り込んで土着民牧師の育成に力を注いだ結果、牧師資格を有する現地民が増えすぎる事態が生じた。養成所の課程を修了した者全員が牧師職に就けるわけではない。聖職者としての能力が不足する者や道徳的規律に欠ける者はもちろん、能力や資質に恵まれていても村落教会にポストが空いていなければ牧師として招いてもらえず、出身村に帰って農夫になるほかない。養成所修了者のうち牧師になれるのは半数以下の極めて優秀な者のみであった。他の進路に宣教師としてパプア島へ行き布教することがあったが、これも成績優秀にして品行方正な者のみが選ばれた。ニウエ人のパプアでの宣教は 1953 年まで続けられた<sup>3)</sup>。

## 2. 教会指導者の変化

宣教師は依然としてニウエ社会では全般的なアドバイザーとして指導性を認められていたが、その権威に翳りが見えてくるのがこの時代である。土着民の牧師や執事の間に宣教師の決定に叛意を表す者が出てきたことがそれを示している。1915年に宣教師 James Cullen は、「宣教師の権力は微々たるもので実際にはそれは執事的手中にあり、極めて難しい問題が発生した時のみ助言が受け容れられるから、執事等村の教会のリーダーたちと同意に達するためには常に努力を要する。例えば、以前は牧師の選出は宣教師の判断に基づいた権限であったが、当節は執事を中心とした教会会衆が彼ら自身で牧師を選びたがっている」<sup>④</sup>と述べている。

この傾向は村落により若干の差異が見られる。Alofi に関しては、Gavin Smith が1913年に「Alofi は他村よりひどい。人々は既定の禁止事項を全て廃止しようとしていて、宣教師の指導や助言を受け付けようとしなない」<sup>⑤</sup>と述べている。Hakupu について Cullen が報告している記録によると、1915年のこと、会衆が彼ら自身が選んだ新しい牧師候補者の承認を求めてきた。これに対して島の牧師たちは相談を受けなかったことに不満の意を表明した。彼らは新規に村落教会の牧師を選ぶ前にまず牧師会議で審議する事を欲していたのである<sup>⑥</sup>。この様にゴスペルの伝播が早かった Alofi や Hakupu ではすでに村の教会会衆が牧師の選出決定権を主張していた。

風紀・規律問題に関して決定的な権限はまだ宣教師が持ち、F. E. Lawes は依然として「ニウエのキリスト教徒は彼らだけで教会運営を遂行するには十分な判断力が不足している。彼らに任せるにはまだ多年を要する」<sup>⑦</sup>と主張して譲らないが、ニウエ教会は徐々に土着民によって組織的に運営されるようになりつつあった。

村落レベルの問題は村の執事たちが審議し、その後、Alofi で月一回開催される全島牧師会議に提出された。この会議は各村から上ってきた問題を話し合い、調整する機関である。すなわち村の教会の問題を宣教師に上げる前の重要な段階として牧師会議が機能するようになったのである。また年一回、全島教会会議が開かれ、そこには島内の牧師と執事が全員出席した。宣教師は出席しなかった。教会生活全般についての問題を審議し、そこで出された提案や要求が宣教師に対して具申された。この様にこの時代に土着の教会の指導層が宣教師の権威や政策に対して一層批判的になり、発言権や意思決定への参加をより強力で求める立場を明確にしてきたといえる。こうした動きは一つには前時代から続く献金の使途への不満と関連して起こったものである。

## 3. 財政自治権への要求

前章で述べたようにニウエの人々は競い合って *poa* や *fagai* の為に労働を行い、金を貯め、教会に献金した。在来の慣習である *poa* も *fagai* も彼らにとって贈れば見返りのあるものであった。しかし献金した金は殆ど L.M.S.本部へ送られてしまい、彼ら自身の教会のためには殆ど使えない。実はこの事への不満は以前から存在していた。例えば1887年、ニウエの人々が献金の中から牧師の給与を払ってほしいと言い出した時、F. E. Lawes は L.M.S.への献金を地元優先に流用する事はできないと拒絶している<sup>⑧</sup>。多額の献金が毎年 L.M.S.へ送られ、彼らには還元されないため、次第に人々には以前に比べて L.M.S.本部への協力を厭う傾向が出てきた。

そして再び献金の使途について人々の中から要求が出てきたことが在留宣教師 Gavin Smith の1913年の記録に見られる。人々は *poa* を分割し、一部は L.M.S.へ送るが残りを地元ニウエで教会堂や牧師館の建設や修理に使いたいと申し出た<sup>⑨</sup>。さらに、宣教師は本部から俸給を得ているのであるから地元民は彼らに *poa* や *fagai* を贈る必要はない、等の主張も現れた<sup>⑩</sup>。財政問題ばかりで



はない。1914年の全島教会会議では④執事が判事や警官の役割を引き受けること、⑤*poa*の一部を教会の諸経費に充てること、⑥教会堂の清掃や鐘つき等諸雑用の奉仕に対する報酬の支払いや聖餐式の飲食物を購入する代金のために教会に基金をつくること等ニウエ教会発展のために変革できることは何かという議論をしている<sup>⑩</sup>。

1915年、L.M.S.本部の代表団が来島し、土着民牧師や執事と会談した結果、土着の人々の意志決定権の拡大という要求に賛意を示した。それは島民に権利を与えると同時に責任をも引き受けさせるという paternalistic な観点からの決定であったと考えられる。その結果、新しい委員会が作られることになった。宣教師を議長とし、全島教会会議が選出する2名の委員と宣教師が指名する2名の委員から構成されるものであった。この委員会は牧師会議からも全島教会会議からも独立したもので、⑦牧師養成所入学生の選抜、⑧村落教会へ派遣する研修生の能力査定、⑨村落教会の牧師職への候補者の選定、等に関する権利を持っていた<sup>⑪</sup>。教会組織に対する土着牧師の発言力、影響力が徐々に強まってきたといえるであろう。

#### 4. 教会組織の自立に向かって

1919年、在留宣教師 Cullen の他界後、後任が赴任して来るまでの間、土着の牧師たちがニウエ教会の管理を実行する機会に恵まれた。Fakahuikula, Tofolia, Ikimatatoa が教会関係を、Falani が養成所を分担管轄した。この間に彼らは大胆な変革を教会組織に持ち込み、それは教会の資金管理にまで及んでいた。これはニウエ教会基金設立を企図するものであったと思われる。そして翌年、新在留宣教師 Caleb Beharell が赴任してきた時、この牧師たちと執事たちが集まって Beharell に教会資金は自分たちで管理する旨、宣言した。しかし、最終的には従来どおり教会資金を全て宣教師に託さざるを得なくなり、教会基金の設立も土着牧師による財政的自治権獲得の企図も失敗に終わった。そして翌年、責任者の Fakahuikula は免職された<sup>⑫</sup>。

前述の1915年の委員会に代って1923年に新しい全島レベルの委員会が設立された。構成員は牧師と執事各々6名ずつで、各村落から毎年1名が選出される。村の専属牧師の評価、養成所入学者の選抜、全島会議への勧告・要請等を含む教会関連の問題解決にあたって宣教師を補助する役割を持つ<sup>⑬</sup>ものであった。

この時期のニウエの教会にとって最重要課題は“自立”であった。財政的にも教会運営上も L.M.S.管理から離れた自己完結性への希求が極めて強く、焦りすら見られる。なかんずく1926年の早魃の対処のしかたにそれがよく表われている。全島会議で L.M.S.へ財政援助を求めるべきか否かを審議したが、結論は「我々ニウエ人の、自分達で問題解決を図る逞しさを見せよう。そのため、L.M.S.には何も訴えない」<sup>⑭</sup>ということになった。彼ら自身でニウエ教会を管理する能力を有することを証明しようと考えたのである。

村の教会会衆は一方で L.M.S.や牧師への食糧や金銭の提供及び労働奉仕を続けた。そして1920年より L.M.S.への献金の10%を村の教会の諸経費のために確保しておくことが了承された<sup>⑮</sup>。宣教師は依然として島に在留していたが、全島会議の結成と1923年の新委員会の設置によってニウエ教会と各村落教会の意思決定及び様々な日常的課題の解決における自立の程度が一層高まったことが指摘できる。

ところで在留宣教師 Harold Taylor の報告には「ニウエでは村落そのものが牧師の主人である」と述べられている。牧師がリーダーとして芳しくない人物であると村は彼への食糧支給を削減したり、執事の決定を受諾しない牧師の礼拝式を拒絶したりする村もあったという。1940年の Alofi の例では村民が集会をする時の食糧購入費用を教会経費から出そうとしなかった牧師がその地位を

失った<sup>⑩</sup>。こうした傾向は牧師の権威が低下して執事の権限がより強まった事を意味しているのではない。在来の制度においては *patuiki* や *pule* が人々の意思や期待に沿わず恩恵をもたらさないとその地位から追われたが、彼らに取って代った牧師が同じ扱いを受けているのである。*patuiki* や *pule* が牧師に代ったもののキリスト教化後のニウエ社会が従前の構造的特徴を持ち続けている事の証左といえる。

1946年は Peniamina がニウエ島に送り込まれ、L.M.S.のキリスト教伝道が始まってから100年が経過する年であった。在留宣教師、牧師、執事たちは百周年記念プロジェクトとして「百周年記念大学」の設立を掲げ、前年より建設を開始した。このプロジェクトはニウエの各教会の財政努力のみで行われ、L.M.S.からの援助は受けなかったといわれている。全ての村落の男、女、子どもたちが労働奉仕はもちろんのこと、食糧を提供し、建築資材の購入費を稼いで献金した<sup>⑪</sup>。

この実施過程からいえることはニウエの教会はこの時期にはすでに財政的な自立を遂げているという事である。英国人宣教師は未だに在留し、教会組織の中で全般的な権威を保持していたが、限られたものになっており、教会の運営は牧師と執事により執行されていたと考えてよい。特に村落レベルでは教会は村民会衆が財政的にも行政的にも実質的に自立して運営されていた。財政的自立、行政的自立、聖職者の養成による自力布教の3点から見れば土着化の域に達したという事ができる。

この様にニウエ島民が過去100年の間、単にL.M.S.と英国人宣教師の影響による受動的な変容に身を委ねてきたのではなく、ニウエ社会に適合した教会へと変革を重ねてきた事に矜持もっていた事は明らかである。それにも関わらず百周年記念祝賀会に当時のニュージーランド首相 Peter Frazer から届いた祝賀電報には、ニウエ人や土着教会執行部への感謝や評価の言辞が一切なく、L.M.S.と大英帝国の偉大な業績を称えるばかりであった事に土着民の間には強い不満を感じた者も多かったという<sup>⑫</sup>。

## Ⅶ 独立教会へ——結びにかえて

第二次大戦後における世界的なキリスト教倫理の衰弊と反植民主義の興隆はニウエに関して言えば直接的な影響はなかった。しかしそうした潮流の中にあって、かつて大英帝国膨張の最前線の一翼を担っていたL.M.S.に方針転換が生じ、その事がニウエの宗教世界に変革をもたらし、ひいてはニウエ社会全体にまで波及した。新方針とは、現地社会の教会運営全体に責任をもつ中心的会議を設置し、土着の文化や社会にしっかりと根付いた独立的な教会を速やかに樹立させるというものであった<sup>⑬</sup>。それは土着民に自己責任を認識させる事と合わせて自決権を認める、というまさに paternalistic な理念に由来するものである。もちろん19世紀末に太平洋全域で始まった現地教会の財政自決権を求める動きの強まりも一因をなしている。だが、1950年代に起こってきた宗教界全般の変化——様々な宗派の出現と活発化——に対応してゆくには本部のあるロンドンはあまりに遠すぎて機敏な対応が困難であるという状況認識も一因していたと考えられる<sup>⑭</sup>。

50年代にはニウエでもキリスト教の他の宗派が上陸を狙っていた。安息日再臨派は19世紀末から布教団を送り込む試みを数回繰り返したが、いずれも彼らの入島はL.M.S.の宣教師と島の教会指導者たちの猛反対に会い、成功していない。1910年代にラロトンガやサモアで改宗したニウエ人が帰島時に持ち込み、わずかな人数の信徒を得て1920年代までに小さな教会を建てたものの信徒拡大には至らなかった。

1951年にモルモン教が入って来た時、ニウエ教会会議は在留弁務官 C. H. Larsen に対し、モル

モン教受容反対声明を直接送付したが、Larsen は教会会議はまず L.M.S. 宣教師を介して植民地政府に申し入れをすべきであると応じた<sup>③</sup>。これに対してニウエ教会会議は激怒し、以下の様な声明を Larsen に送り付けた。これにはニウエ教会が L.M.S. から独立しているという誇りと自負が表明されている。

あなたはニウエにおけるニュージーランド政府の代表だ。L.M.S. 宣教師の Chuck 氏はニウエにおける L.M.S. の代表だ。今回の事はニウエ内部に関する事柄であるから Chuck 氏に事前に相談に行くべき問題ではない。ましてや彼を通してあなたに照会してもらう筋合いのものでもない。ここは我々の島である。あなたの今回の態度は全く尊敬に値しない<sup>④</sup>。

教会会議はニュージーランド政府の担当大臣（島嶼領担当大臣）にも、L.M.S. 以外の宗教がニウエに入るのを認めぬように嘆願書を出した<sup>⑤</sup>が聞き届けられず、1952 年にはモルモン教が入って来る。さらに 1955 年にはローマ・カトリック教会が正式に布教を始めた。これら新宗派の導入は実のところ、ニュージーランド政府代表すなわち植民地行政府の指導により行われた。彼らが歓迎したのは、それによってニウエ教会がニウエ社会をほぼ統制している体制を瓦解させ、行政府の実権を拡大することを企図したからと解釈されている<sup>⑥</sup>。島民達は、新宗派の来入を阻止できなかった理由は、島が政治的に独立しておらず、植民地政府の意向を無視できなかったことにであると認識した。宗教と政治両面における自決権が必要であることに気づいたのだ。この後、ニウエの人々はニウエ教会の L.M.S. からの自立のみならず、国としての政治的独立を希求するようになる。

ところで在留弁務官及び行政府はニウエ教会に対して不満を募らせていた。教会の厳則である安息日遵守のため、日曜に入港する貨物船の荷揚げ作業を教会は認めようとしないのである。ついに行政府は法によって荷揚げ作業の人足を日曜労働に駆り出した。これに対して教会会議はニュージーランド政府に抗議文を送っている<sup>⑦</sup>。

行政府とニウエ教会の対立は様々な面で明確になっていた。100 年前にヨーロッパ人が彼らの宗教倫理・道徳を持ち込み、違反行為には厳罰をもって対処しながらその徹底化に努めてきたために島民の生活にすっかり根付いた今、その倫理・道徳を守ることが批判されているのである。それは教会と土着民にとっては真に理不尽な事である。一方、行政府から見れば、時代の変化に応じた行動が最善であり、旧弊を捨てない固陋こそが非難されるべきものである。行政府はまた、牧師たちに権威と権力が集中していることに対しても不満をもっていた。一つにはそれが行政府による権力行使を阻害するからであり、また、牧師及び「神」を極度に恐れ尊崇の念をもつ状態がキリスト教伝来以前の土着の人々の shaman への態度とメンタリティに極めて類似しており、いわば復古への危惧から発するものと考えられる。

その様な対立を宿しつつ 1960 年代から 70 年代に南太平洋で起こった新しい波にニウエ社会も乗ってゆく。土着民の教会が L.M.S. の統制を離れ次々と独立教会になっていったのである。クック諸島は 1945 年、サモアと P.N.G. は 1962 年、仏領ポリネシアは 1963 年、キリバスとツバルは 1968 年、そしてニウエは最後になったが 1970 年に独立教会となった。それは政治的にも自治政府と国会を持った独立国家となる 4 年前の事であった。

## 【註】

I

① Koskinen 1953 : 49

- ② Tahiti, Hawaii, Tonga, Samoa 等に見られる。
- ③ 最も組織的な研究として Boutilier, Hughes & Tiffany (eds.) 1978 があげられる。
- ④ Lawes, F. E. 1902 : 3
- ⑤ Loeb 1985 (1926) : 55
- ⑥ Goldman 1970 ; Ryan も Sahlins (1967) の “more stratified” から “more egalitarian” までの4類型モデルを検討し、ニウエを “the most egalitarian” のカテゴリーに入れている。Ryan 1977 : 167-170
- ⑦ 福音主義を説くプロテスタントによって1795年にロンドンで結成された。主に南太平洋及びアフリカで宣教活動を行った。

## II

- ① Harbutt & Drummond : L.M.S. Microfilm 336
- ② *Niue Statistics* 2004
- ③ *Niue Agricultural Census* 1989 : 1
- ④ 1991年センサスでは農業戸数の13%が換金用作物を生産していたがその後の人口減少と共に限りなくゼロに近づいている。
- ⑤ The Niue Constitution Act 1974
- ⑥ 首相ですら自家消費用の食糧は自ら耕作しあるいは漁や猟を行って手に入れる社会であるから、牧師も自家用食糧確保のための労働は行う。
- ⑦ *fagai* については馬場 (1996 : 29-30) を参照。

## III

- ① Trotter 1979 : 48
- ② Ryan, op. cit. : 9
- ③ Loeb, op. cit. : 29
- ④ Smith 1983 : 92
- ⑤ 伝染病はインフルエンザらしい。梅毒という説もある。Loeb, op. cit. : 33
- ⑥ Smith, op. cit. : 93
- ⑦ Crocombe & Crocombe 1968 : 14-15
- ⑧ Ibid.
- ⑨ Powell 1868 : 40

## IV

- ① Ibid.
- ② Turner 1984 : 466-467 ; Powell, op. cit. : 41-43
- ③ Makani 1993 : 7
- ④ Turner, op. cit. : 467
- ⑤ Ibid.
- ⑥ Mutalau の既婚女性と駆け落ちしたといわれている。K. Makani による Panikitau からの聞き取りによる。Makani, op. cit. : 61
- ⑦ Murray 1863 : 363 ; Powell, op. cit. : 44
- ⑧ Makani, op. cit. : 15
- ⑨ Vilitama 1982 : 92
- ⑩ Murray, op. cit. : 368
- ⑪ Talagi 1982 : 112
- ⑫ Etuata & Tanaki 1982 : 100
- ⑬ Etuata & Tanaki, Ibid. : 99 ; Loeb, op. cit. : 166
- ⑭ Loeb, op. cit. : 166, 174 ; Smith, op. cit. : 50 ; Ryan, op. cit. : 97
- ⑮ Makani, op. cit. : 10
- ⑯ Loeb, op. cit. : 35
- ⑰ Ibid.
- ⑱ Loeb, op. cit. : 35

- ①⑨ Ibid. : 35-36  
 ②⑩ Ibid. : 34  
 ③⑪ Talagi, op. cit. : 115  
 ④⑫ Ibid.  
 ⑤⑬ Avatele はノウエ島唯一の浜辺のある村である。  
 ⑥⑭ Makani, op. cit. : 14  
 ⑦⑮ Ibid. : 15  
 ⑧⑯ K. Makani による Tuputoga Vemoa への聴き取りによる。Makani, op. cit. : 15  
 ⑨⑰ Loeb, op. cit. : 34-35  
 ⑩⑱ Murray, op. cit. : 366  
 ⑪⑲ Makani, op. cit. : 19  
 ⑫⑳ Murray, op. cit. : 366 ; Powell, op. cit. : 46  
 ⑬㉑ Murray, op. cit. : 371  
 ⑭㉒ *Niue (Savage Island)* : 2 ; Talagi, op. cit. : 116  
 ⑮㉓ Murray, op. cit. : 366  
 ⑯㉔ Makani, op. cit. : 19  
 ⑰㉕ *Niue (Savage Island)* : 2  
 ⑱㉖ 原則的には一夫一妻制であったが *toa* や *pule* の中には一夫多妻を行っている者もいた。  
 ㉗ Murray, op. cit. : 370 ; Talagi, op. cit. : 116  
 ㉘ Murray, op. cit. : 371  
 V  
 ① Makani, op. cit. : 22  
 ② Koskinen, op. cit. : 3  
 ③ Ibid. : 36  
 ④ Ibid.  
 ⑤ Ibid. : 55-58  
 ⑥ Becke 1898 : 287 ; Makani, op. cit. : 49  
 ⑦ Koskinen, op. cit. : 36  
 ⑧ Loeb, op. cit. : 38-39  
 ⑨ “Church Members 1872-1912,”  
 ⑩ Lawes, F. E. 1877  
 ⑪ Cullen 1893  
 ⑫ Makani, op. cit. : 28  
 ⑬ Lawes, F. E. 1892  
 ⑭ *Niue (Savage Island)* : 14  
 ⑮ Ibid. : 5-6, 14-15  
 ⑯ Ibid. : 12  
 ⑰ L.M.S.が属する英国国教会派にならって初期から執事をおいた。彼らの役割については記録に残っていないが、Makani によると口頭伝承では牧師を補佐し牧師の生活を物的に支援するマネジメントが仕事であったという。現在でもそういう役目である。  
 ⑱ Makani, op. cit. : 35  
 ⑲ *Niue (Savage Island)* : 6 ; Ryan, op. cit. : 155 ; Talagi, op. cit. : 118-119  
 ⑳ Lawes, F. E. 1877  
 ㉑ Smith, op. cit. : 42 ; Talagi, op. cit. : 118  
 ㉒ Etuata & Tanaki, op. cit. : 100 ; K. Makani による Talaiti への聴き取りによる。Makani, op. cit. : 41  
 ㉓ *Niue : A Resource Book for Teachers* 1978 : 27-28  
 ㉔ *Niue (Savage Island)* : 17, 23

## VI

- ① Makani, op. cit. : 70
- ② Ibid. : 75
- ③ Ibid.
- ④ Ibid.
- ⑤ Smith, G. 1913
- ⑥ Makani, op. cit. : 76
- ⑦ Lawes, F.E. 1911
- ⑧ *Niue (Savage Island)* : 15
- ⑨ Smith, G. op. cit.
- ⑩ Cullen 1914 a
- ⑪ Cullen 1914 b
- ⑫ Beharell 1920
- ⑬ Lenwood 1920 ; Beharell 1920 ; Makani op. cit. : 80
- ⑭ Beharell 1923
- ⑮ Barradale 1926
- ⑯ K. Makani による U. Makani への聞き取りによる。Makani, op. cit. : 80
- ⑰ Ibid. : 83
- ⑱ Ibid. : 84-85

## VII

- ① Forman 1982 : 168
- ② K. Makani による Tongia Viviani への聞き取りによる。Makani, op. cit. : 97
- ③ Ibid.
- ④ Forman, op. cit. : 23
- ⑤ Makani, op. cit. : 101

## 【参考文献】

- 馬場優子 「ニウエ島の村落生活」『大妻女子大学紀要－文系－』第 28 号, 1996
- Barradale, V.A. Report on the Niuean Church, 8 October, 1926 (PMB 709)
- Becke, L. *Wild Life in Southern Sea*. T.F. Unwin, 1989
- Beharell, C. Important Events, 1920, (PMB 704)
- Beharell, C. Letter to Lenwood, 7 July, 1923, (PMB 701)
- Boutillier, J. A. Hughes, D.T., & Tiffany, S.W. (eds.) *Mission, Church, and Sect in Oceania*. Univ. of Michigan Press, 1978
- Buzacott, *Mission Life in the Islands of the South Pacific*. USP, 1985 (1866)
- Chapman, T. M. *The Decolonisation of Niue*. Victoria University Press, 1976
- Church Members 1872-1912 (PMB 711)
- Crocombe, R. G. & Crocombe, M. *The Works of Ta'unga*. Australian National University, 1968
- Cullen, J. H. Annual Report, 9 November, 1893
- Cullen, J. H. Letter to F. Lenwood, 4 October, 1914 a (PMB 701)
- Cullen, J. H. Letter to Thompson, 1 July 1914 b (PMB 701)
- Etuata, I. & Tanaki, P. "The Wisdom of Niue," *Niue : A History of the Island*, Chapman, T. et als. , USP & The Government of Niue, 1982.
- Forman, C.W. *The Island Churches of the South Pacific*, Orbis Books, 1982
- Goldman, I. *Ancient Polynesian Society*. University of Chicago Press, 1970
- Harbutt, W. & Drummond, G. LMS Microfilm, 336
- Koskinen, A. A. *Missionary Influence as a Political Factor in the Pacific Islands*. Annales Academiae Scientiarum Feunicae vol. 78, 1953

- Lawes, F. E. Annual Report, 8 October, 1877
- Lawes, F. E. Annual Report, 7 September, 1892
- Lawes, F. E. Letter to Thompson, 7 April, 1902 (L.M.S. Archives)
- Lawes, F. E. Annual Report, 11 February, 1911
- Lenwood, F. Letter to R. H. Head, 31 March, 1920 (PMB 701)
- Loeb, E. M. *History and Traditions of Niue*. B.P. Bishop Museum, 1985 (1926)
- Makani, K. *Ekalesia Niue : An Indigenous Church in the Making*. (M.A. Thesis, Pacific Theological College, 1993)
- Murray, A. W. *Missions in West Polynesia*. John Snow, 1863
- Niue : A Resource Book for Teachers*. Niue Education Department, 1980
- Niue (Savage Island)*, (historical notes by unknown compiler, n. d.,) MS Papers 1273,
- Niue Agricultural Census* 1989
- Niue Census of Population and Dwellings* 1991 1993
- Niue Constitution Act 1974
- Niue Statistics* 2004
- Powell, T. *Savage Island*, John Snow, 1868
- Ryan, T. Prehistoric Niue. (M. A. Thesis, Auckland University, Department of Anthropology, 1977)
- Sahlins, M.D. *Social Stratification in Polynesia* University of Washington Press, 1967
- Smith, G. Letter to J. H. Cullen, 12 October, 1913 (PMB 701)
- Smith, S. P. *Niue : The Island and its People*. USP. 1983 (1902)
- Talagi, F. "Early European Contacts," *Niue : A History of the Island*, Chapman, T. et als., USP & The Government of Niue, 1982.
- Thompson, B.C. *Savage Island : On Account of a Sojourn in Niue and Tonga*. R. Mcmillan, 1984 (1901)
- Trotter, M.M. *Niue Island Archaeological Survey*, 1979
- Turner, G. *Nineteen Years in Polynesia*. Mcmillan, 1984 (1861)
- Vilitama, H. "Traditional Politics," *Niue : A History of the Island*, Chapman, T. et als., USP & The Government of Niue, 1982.
- Williams, J. *A Narrative of Missionary Enterprises in the South Sea Islands*. London : John Snow, 1838